

Title	crèmeの誕生
Author(s)	栗山, 愛以
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 3, p. 26-26
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/11070">https://hdl.handle.net/11094/11070</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

るという私たちの「普通のはだか」がそこからは抜け落ちている。その点で、TOKYO GIRLSのはだかの女の子たちの何もない背景には、キッチンでも、お風呂でも、恋人の待つベッドでもなんでもあてはまる。セックスしていてもよいけど、セックスしていないというのもありなのである。生活しているはだか、

という気楽さ。それはLOVE 'SBODY展が提示したメッセージを超えるものだったのではないだろうか？

(おおきたたけとしくりたりゅうこたかはしあや  
博士前期・後期課程)

## crème の誕生

栗山愛以

研究室のドアの上、極彩色を放つわがcrèmeのポスターにお気づきだろうか。crèmeには、いわゆる「クリーム」のほかに、「えりぬき、精髓」そして「いかれた」という意味がある。これこそまさに、哲学でファッションをやろうとしている一見いかれたわれわれにふさわしい。

小林昌廣は『臨床する芸術学』のなかで、ファッションとは、それを身にまとう人間にとってみれば「実用芸術」であり、徹底して「見る」側に立つ人間にとってみれば「純粋芸術」であると言っている。また、医学に身を置いているというその立場から、すべての患者が自らの身体に対する「専門家」であると考えが、「実用芸術」と言われるように、みずからのファッションに対しても、われわれは

「専門家」なのではあるまいか。そして、「純粋芸術」としてそれに距離をおくこともできる。一方思考するということも、誰もがやっていることであり、誰もが「専門家」であると言える。このことをなおざりにしがちな哲学の現状をいましめるべく「臨床哲学」をたちあげたとするならば、同じような構図をわりあい明らかなかたちでもつファッションは、この場で論ずるに値するのではないだろうか。

このようにファッションの「実用芸術」的要素と「純粋芸術」的要素をくみつくすためには、バルトが現実の衣服の方だけに向いていると言う社会学、イメージを認識させようとすると言う記号学ではことたりない。こうしてわれわれは、その中間的切り口を濃くしつこく模索しながら、臨床哲学の精髓となるべく、日々邁進しているというわけなのである。

(くりやまいとい 博士前期課程)